

### アフターテニスのソケット懇談会現場より

#### 楽しからずや話題が思わぬ方向に飛び交う懇談会

テニス後の白砂賢治、大谷康仁、それに私・佐々木洋の SOS トリオによる昼食会には結構面白いところがあります。話が限りなく飛び飛びになってつながってくるからです。東京六大学の半分の早慶東出身者の集まりですし、突拍子のないところに話が飛ぶことが多いから、ゴルフのソケットから名をとってソケット・クラブとでも名付けたいくらいです。ソケットとは本来、ゴルフクラブのヘッド部分とシャフトを接合するために用いられるパーツなのですが、「ソケットする」ということは、一般的には「シャンク」と呼ばれるミスですが、打球の際にボールがソケットに当たるとボールがとんでもない方向に飛び出すことを意味しています。楽しからずや話題が思わぬ方向に飛び交うソケット懇談会。

#### よく言葉が伝わってきたラジオ主体の時代

つい先日の昼食会でも、どんな拍子ででたのか私が「さすがに岡本敦郎なんて歌手知らないだろ、“君たち若いもん”は。」とエラソーに問いかけたところ二人から「知ってますよ、♪白い花が咲いてた 故郷の遠い夢の日♪なんて歌ってた歌手でしょ。」と返ってきたので、the oldest 81 歳の私と the youngest 75 歳の大谷さんとの間の時代感覚の違いなんて大して違わないんだと驚きました。そして白砂さんがすぐに、「そうそう、あの頃はラジオが主体の時代だったから、歌謡曲や落語からよく言葉が伝わってきましたね。林家三平でしたっけ、“恋しい恋しい”を“変しい変しい”なんて言って笑わせていたのは？」と発するとすぐに大谷さんから「いや、柳亭痴楽の綴り方教室だったんじゃないかなあ」とリターン。

#### “いとしいとしと言う心”論議

すると今度は白砂さんがちょっとソケットして、「あの頃は恋のことを“いとしいとしと言う心”なんて言っていましたね。あの頃は今より大分趣きがあったような気がしますね。」と一言。おっと、これは日本語教師として一言しなくちゃと思って、「あのね、日本語は漢字を書く・読むがなかったらさほど覚えにくい言語ではないんだよ。ところが漢字の読む・書くが加わると世界一クラス学ぶのが難しい言語になっちゃうんだ。」と言ってから、「だけど、昔の日本人は“恋”の旧字体の“戀”のような難しい漢字を“いとしいとしと言う心”のような素敵な漢字覚え唄という感じにして楽しんでいたんだね。恋人同士を“赤い糸で結ばれている”という言葉があるし、“戀”という字には男女が心の糸をお互い引っ張り合っている様子がみえるから、趣きがあるっていえばまあそうだけだな」と一人ぼそぼそ言っていました。

#### “ほの字”論からソケットしたお詫びのしるしに

するとこの the oldest のぼそぼそ節が聞こえたのかどうか the youngest の大谷さんから、「いや、やはり昔の日本人の言葉には趣きがありましたよ、恋だ愛だなんてあけすけに言わずに“ほの字”なんて言ってるんですから。しかし、“ほの字”って“惚れる”の略語なんですかねえ。」という言葉が飛び出しました。慌てて日本語教師「確かに略語の一種だね。しかし、日本語には“国際連合”に対する“国連”、“原子爆弾”に対する“原爆”という形の略語が圧倒的に多いんだ。そ

の方式で“パーソナルコンピューター”から“パソコン”、“ワードプロセッサ”から“ワープロ”なんて英米人が分からない略語ができちゃうんだよ。」と、“ほの字”論からソケットしてしまいました。そこでそのお詫びのしるしに、帰宅してからインターネットから検索した“ほの字”論の一節を以下の通りご紹介します。

「ほの字」とは【ほ】を頭文字とする言葉のことだがこの場合の「ほ」は「惚」のことであり、「ほの字」は「惚れている」という意味で室町時代から続く女房言葉の一種である。隠語・仲間内の言葉として使われ始めたといわれる言葉“女房詞”(ニョウホウコトバ)は、後に將軍に仕える女性の間で広まり、さらに武家の娘や町娘の間で広まったと言われている。宮中の女房達から…ということは、元々上品な言葉、聞こえのいい言葉、下品でない言葉であったということになる。確かに「惚れた」「惚れている」という思いを遠回しに表現する際に用いる上品な言葉であったが、「彼女は絶対オレにホの字だよ」などという砕けた言い方がされるようになったのは、江戸時代になって市中で広く使われるようになったから。更に、恋心を表に出せる時代背景となった現代においては死語となっている。

## “御の字”論で本日の中締め

“ほの字”論から更に、「“ほの字”が略語なら“御の字”も略語なんだろうか。でもどんな言葉が省略されているんだろうね。」と“御の字”論にソケットしたのは白砂さんでした。そこで私が「今日は、日本語教育というより国語教育の領域の話題ばかりだなあ」と思いながら、「いや、これは略字でなくて、字面通り“御という字”という意味なんだよ。“御”の字は“o”と読んだり“go”と読んだりすることがあるけど、名詞の前に付けて、相手に対する敬意や丁寧さを表す時に使われるでしょ。だから、“御の字を頭に付けるくらいありがたいこと”っていう意味になるんだよ。」と精々“日本語教師っぽい”説明をしたところで本日のソケット談義はチョッピリ中途半端な形で時間切れとなりました。しかしこれも、帰宅後インターネットで調べてみると以下のようなことが分かり、本日のソケット談義は「御の字」の結果となったような気がしています。

## 遊里で生まれた“御の字”もソケットして

そもそも“御の字”は江戸時代の遊里の言葉の一つで、遊女が”カネを払ってくれて、自分を大事に扱ってくれる客”という意味で使っていた隠語なんだそうです。これが転じて「御の字」は、非常に結構であること、十分に満足していること、大変ありがたい感謝したい気持ちを意味し、また時には「しめた」という思いを表す言葉として使われるようになり、これが現代へと受け継がれてきて、「性格も手腕も申し分なく、委員長として御の字だ」などと使われるようになったというわけですね。しかし一方、時代が経つにつれて、「まあまあ」「悪くはない」、また「だいたい納得できる範囲である」「良くもないが、まあ悪くもない」などのように、「御の字」を妥協の意図を込めて「とりあえず OK」「そこそこ納得できる」という意味で使ったり受け取ったりする日本人が増えてきているとのこと。例えば「70点取れば御の字だ」という文章の場合、諸兄姉は「御の字」をどのように受け取られますか。平成20年度に文化庁が10代後半～60代以上の男女を対象として行った「国語に関する世論調査」では、「御の字」という言葉について本来の意味「大いにありがたい」・「結果に満足している」で使っている人は全体の約38%。「一応、納得できる」・「まあまあ妥協できる」と言った意味合いと誤用している人が約51%だったということです。言葉の中にも思わぬ方向にソケットした意味を持ち合わせてくる言葉があるものなんですね。